

国木田独歩「富岡先生」論

山口実男

はじめに

この作品は、明治三五年七月に「教育界」において初めて掲載され、後に『独歩集』（明治三八・七）に収録されている。明治三五年前後の独歩は「牛肉と馬鈴薯」「少年の悲哀」「酒中日記」「運命論者」「春の鳥」などの代表作を次々と発表している。「富岡先生」は独歩作品の中でも秀作の一つだと考えるが、意外にもその評価は芳しくない。

北野昭彦は、富岡先生の性格悲劇が主題であり、その反政府的志向の具体的内容の欠如がこの作品の弱さになっていると論じている。また、桑原伸一は、この作品の意図は、その外枠の部分にあり、悲劇的な小民への同情と藩閥体制への批判を登場人物に託し、独歩の浪漫的理想を主体化（詩化）していると述べている。³だが、「藩閥体制への批判」を主題とするなら、富岡先生像の中に革命的理想は見つかるとであろうか。また、作品の外部に主題を

早計に求める論点に疑問を感じる。他には新保邦寛が、「富岡先生」は「巡查」のような写生文から大きく前進し、高山法学士や村長の書簡によって富岡先生の心理分析がなされ、内面世界に踏み込もうとしたと述べている。また、新保は従来の独歩にはなかった「環境」や「境遇」という視点が生まれたことについて当時の文壇の影響（社会小説の擡頭）もさることながら、矢野文雄が主催した社会問題研究会に独歩が関わった事を指摘している。

本論では作品中に文芸的価値を見出し主題を探索したい。独歩自身も「詩化する為め」と述べていることから、「富岡先生」が芸術作品として創られたと推察する。「富岡先生」は独歩の力量を十分に発揮した作品であると考え、富岡先生の世間並みにもこの解った優しい一面を読み手は見過ごし易くなっている。そのため「個人感と社会感が戦」ているところから醸し出される抒情性を感じ取ることが読み手にとって難しくなっているのである。そういった観点を視野に入れつつ人物形象、プロットなどを分析し、独歩の人生観、教育観なども考察しつつ主題に迫ってみたい。

「教育界」とは明治三四年一月三日に金港堂（創業者 原亮三郎）より創刊され、編者は曾根松太郎である。同誌第一巻第一号の「発刊の辞」には「明治の聖代になって国勢の伸長は物的事業に於て、精神的に於いても著しいが、後者とくに教育についてはまだまだ改善の余地は多く、新規になすべきことも少なくない。しかもこれは、政府や公共団体の独占事業ではなくて、官民が一体となつて行うことにより初めて実行ある発達をとげることが出来る」と記され、広く教育全般にわたり「論説」「學術」「学制」「教授」「訓練」「伝記」「人物月旦」「時評」「雜報」など、あらゆる項目を網羅して誌面を構成している。二〇〇頁にもわたる本格的な教育雜誌である。

「富岡先生」に関する書誌的研究は新保邦寛が詳しい。¹⁾それによると明治三四年創刊の「教育界」は毎月一作小説を載せている。「富岡先生」は「教育界」第一巻第七号（明三五・五）に次号予告されているが、予告は実現されなかった。ようやく掲載されたのが二ヶ月後の第一巻九号（明三五・七）においてである。「教育界」のスタッフの考え方が「教育小説は単に道德的であるだけでなく、家庭に主眼を置くべきだ」と主張する点から、人間性の暗部を見据えた「富岡先生」が馴染まなかつたのも当然であろうと言う。新保は「富岡先生」が「教育界」に掲載されるようになつた要因として草村北星の後ろ盾によるとしている。

一、梅子の役割

他の登場人物が梅子について語つたところを集めてみると、高山は「御存知の通り実に近頃の若い女子には稀に見る所の美しい性質を以て居られる」「女子の特質とも言ふべき柔和な穏やかな何所^{どこ}までも優しい所を梅子嬢は十二分に有^もて居られる」と語っている。また、倉蔵は「お嬢様、マア貴嬢^{あなた}のような人は御座りませんぞ、神様のような人とは貴嬢^{あなた}のことで御座りますぞ」と感心し、村長は「彼秘蔵子なる彼温順なる梅子嬢」と賞讃している。一方、語り手は「梅子は殆ど富岡老人に従来一言たりとも叱られたことはない。梅子に対しては流石^{さすが}の老先生も全然子供^{こども}のやうで、其父子の間の如何^{いか}にも平穩にして情愛こまかなるを見る時は富岡先生実に別人のやうだと誰しも思つて居た」と同調し、語り手、高山、倉蔵、村長などの人物も梅子の柔順さ温順さを語っている。このことから梅子からは当時の典型である良妻賢母像が見えてくる。

梅子と言う名前も当時のヒロイン像の典型である。例えば「富岡先生」と同じ時期に発表された木下尚江「火の柱」²⁾（明三七・一）に登場するヒロインも「梅子」である。この小説は南総里見八犬伝を下敷きにした勤善懲惡物語であり、梅子は善玉のヒロイン役として描かれる。「富岡先生」の梅子は心理的内面があまり克明に表されず、セリフもたつた一箇所だけである。この作品では梅子の個性に深く迫ることはなく、あくまでもヒロインとして

の役割を担わされるのである。

二、大津と細川―その対比的人物像―

大津定次郎は大学を卒業し法学士になった。大津は家庭の経済力にも恵まれ学力的にも秀でていた。卒業後、内務省に入ることが決まっている超エリートである。一方、細川繁は小学校においては、大津、高山、長谷川をも凌いで、富岡塾でも一番出来が良かった。しかし、家計の都合で中学校にも入る事が出来ず、遂に官費で事足りる師範学校に入って小学校教員となった。大津が就職する内務省は地方事務を専管する県治局と警察行政を司る警保局とが中心となっている。内務省が地方を掌握する力もっていることから、そこに就職が決まっている大津と一地方教員である細川とは社会的地位においても対立的な意味合いが濃厚に出ている。職業においてもこの二人は対立的比較がなされている。

次に恋愛、結婚で両者を比較してみよう。大津は梅子に思いを寄せながらも結局は「黒田といふ地主の娘玉子嬢」を結婚相手に決めた。時流に乗り損ね故郷で老い朽ちようとしている漢学教師の娘よりも、経済的にも社会的にも力のある地主の娘を選択した。純粹に恋心を成就させようとするのではなく打算的、功利的に世渡りをしようとしている。

細川の行動を観察してみると富岡先生の愚痴や悪口や気炎の的にならうとも、ほとんど毎夜の如く先生を訪うて十時頃まで話し込んでゐる。逆境にも屈せず梅子への一途な思いを遂げようと辛

抱強く我慢している。第四章で富岡先生に「判然と言へ、コラ！如何しても欲しいと言ふのか、男らしく言へ、コラ！」などと激しく罵られようとも、握りしめた拳の上に熱涙をばらはらと落としながらも耐え抜いた。恋愛、結婚面においてもこの両者は頗る対立的に描かれている。以上のことから大津は作品中で細川のライバル役を担わされていることがわかる。

そのような二人に対して富岡先生の評価はどうであろうか。功利的打算的なエリート大津に対しては「大馬鹿者！」と「大」を付けて激しい叱責を浴びせている。だが、「資性篤実で能く物に堪へ得る」細川にはいくら逆上しようとも「大馬鹿者！」とは言わず、「馬鹿者！」と一度だけ叱っている。このことから富岡先生は細川に軍配をあげていると考えられる。

三、高山と細川―好敵手の出現―

高山は梅子の人柄について「実に近頃の若い女子には稀に見る所の美しい性質を以て居られる」、「若し梅子嬢の欠点を言へば剛といふ分子が少ない事であらう」などと冷静な人物分析を施している。大津のように打算的ではなく梅子の人柄に好意を寄せている。また、富岡先生の人柄については、「老先生の心底には二個の人が相戦つている、其一人は本来自然の富岡氏、其一人は其経歴が造つた富岡先生。そして富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を屈服するに慣れて居る」と指摘し、先生の人物分析も冷静に的確に行っている。高山は感情に流されない沈着冷静な人物である。

さらに、村長に折を見て富岡先生に話を切り出すように依頼していることからも確かな判断力を持った頭の切れる人物である。他にも富岡先生が東京に来た際「ボカリ」と一本やられ、そのうえ「大馬鹿者！」と怒鳴られているが、それが原因で梅子への一途な思いを捨て去ることはなかった。この点は細川に勝るとも劣らない。富岡先生も「同じ大学を出ても高山や長谷川は人間が一等上だのう、其中でも高山は余程見込みがある男だぞ。」と褒め、高山の人間性を高く評価している。富岡先生は高山の人間性を見抜いていた。高山は天津よりも人格的に優れていることがわかり、細川にとつては最強のライバルになる。

四、細川繁に託された理想像

細川の行動を詳細に分析してみよう。例えば、家計の都合で中学校にも入ることができなかったが、官費で事足りる師範学校に入り、小学校教員になったり、富岡先生が婿捜しのために上京した際には「資性篤実で又能く物に堪え」逆境に屈せず真面目に熱心に生きようとした。そして、「毎夜の如く富岡先生を訪うて」、「愚痴や悪口やら気炎やら自慢話やらの的にな」りながらも、終には梅子を貰い勝利を掴み取るのである。

このような理想的人間像、細川繁と独歩の思想とを照らし合わせて考えてみると独歩は、「英雄とは己の生命の意味を重じ、熱血と熱心と熱涙とを以て神の前に、此の地上に同胞の為に尤も真面目なる生涯を送りたる者を云ふ¹⁰⁾」。このような独歩の理想は細

川繁像と重なり合っていると考えられる。この英雄思想については北野昭彦が「日の出」の大島公一の例などを引用しつつすでに指摘している。

しかし、もう一点付け加えたいのは「労働者」としての細川繁像である。独歩は「忍耐と労働¹¹⁾」において次のように述べている。「神の御旨を行はんと志す人は忍耐と労働とを以て左右の武器とせよ」、「ただ今の今、耐え忍べ。ただ今の今力め励め勞し働け。これ真の希望ある者の真の行為なり」と忍耐と労働の重要性を説いている。あるいは、田村三治宛書簡(明二五・九・二二)には「人生は貴し。如此にして始めて貴し。人間の働きに望みあり。如此くにして、始め望みあり。吾れの行先は光明なり。如此にして始めて光明なり。」とあり、労働を称賛し他人にも奨励している。では、なぜ労働がそれほど価値あるものなのだろうか。独歩は労働についてどのように考えていたのだろうか。「社会と人¹²⁾」には次のようにある。

其の働く爾が存在は必ず理想の上に立て置かざるべからず。則ち爾の働きは此の人類社会全体を彼の位置に達せしむるが為に働くなり。(中略)然れども己れ先づ己の黄金時代に住まず、「最高の理想」の上に立たずして何ぞ己の「働き」を黄金時代変化の為に価値化するを望まんや

己の最高の理想を立て、この人類社会全体をその位置に達せしむることが「働」であり、黄金時代到来に役立てることの意義を説いている。さらに、その後の一節に「人生の真意は社会利害の

外に有りて而して働にあり。之れ人生最高の理想也」と述べている。これらから細川繁は独歩の「最高の理想」つまり、「労働」や「英雄」思想を託された人物だと言える。そして、このような理想は独歩独特で独自のものであることから細川は独歩自身が憧れた理想的人間像であったのだろう。

五、富岡先生の胸臆

富岡先生が河原で釣りをしていると、大津が気づかずに先生を辛辣に罵ってしまい、富岡先生が「大馬鹿者！」と大声で一喝する場面がある。一見するとまるでとんでもないひねくれ者の様な印象を受ける。しかし、その前場面では「何だ大津の定さんが来た？ズンくお上りんさいと言え！」「ヤア大津、帰省つたか。」と親しみのこもった声掛けをしている。教え子大津の帰省を喜ぶ態度が伺えることから、元来は世間並みの情ある師弟関係を営んでいたことがわかる。富岡先生が大津に「大馬鹿者！」と一喝した後には、

富岡老人は其儘三人の足音が聞こえなくなるまで対岸を白眼^{まなこ}んでいたが、次第に眼を遠くの禿山に転じた、姫小松の生へた丘は静に日光を浴びて居る、其鮮やかな光の中にも自然の風物は何処ともなく秋の寂寥を帯びて人の哀情をそゝるやうな気味がある。背の高い骨格の逞しい老人は凝然と眺めて、折り折り眼をしばだいたいで居たが、何時しか先きの氣勢にも似ず左も力なさ、うに

とあり、ここには教え子大津に富岡先生の内なる心を自らの性癖故に伝えることができないう悲哀が表れている。富岡先生の心の内には「元来人並みの性情」があるのだが、先生の激しい性癖が遮ってしまった、うまく心の内を伝えることができないのである。その悲しさやりきれなさが「眼を遠くの禿山に転じ」「左も力なさ、うに」の箇所如実に表れている。ここは作品中で唯一富岡先生の心情を秋の自然と共に表現した場面であるから注目すべき箇所である。前後するが、富岡先生は確かに大津に対して「大馬鹿者！」と叫んでいる。だが、よく考えるとここでもっとも不埒な態度をとっているのは大津の方で、富岡先生のこの叱責は師としては当然の態度だと言える。頑固やひねくれ、尊大さばかり目立つ富岡先生ではあるが、ここはむしろ大津の方に非があり、先生の叱責は正当で毅然とした態度だと言える。そこには富岡先生の「個人感」が表れているのである。

第四章において富岡先生は「貴公よく考えて見ろ！貴公は高小学校校長ぢやアないか」、「身の程を知れ！馬鹿者！」などと細川を激しく愚弄している。富岡先生の鬱憤が最高潮に達し爆発しているが、娘をやらないとは一言も言っていない。しかも、部屋の前にいる細川に対して「用があるからちよつと来い！」と言っている。その用とは単に鬱憤をぶつけることではなからう。その後、「帰れ！召喚にやるまで来るな、帰れ！」と言った。言い換えるなら富岡先生の心は揺れているのである。帰郷後、酒の量も増え気炎ますます盛んであったのは東京で先生のプライドが傷付

三

けられたことと、もう一つは梅子を嫁に遣らねばならない父親の苦悩があるからである。富岡先生は細川に対して激しく憤りながらも、ここではすでに細川に配することを半ば決めていたのではないだろうか。高山が「元来老先生と雖も人並みの性情を有つてゐる」と語つていることから、富岡先生は細川の真面目さ熱心さなどを知つていたと考えることができる。だが、娘を思う親心や「その経歴が造つた」尊大さなどといった人間内部の相克があつたために先生の心は荒れてしまいその内なる心を素直に伝えることができなかったのである。すなわち、富岡先生の内では「個人感」と「社会感」が戦つてゐるのである。高山の発言にある「老先生の心底には常に二個の人が相戦つて居る、其一人は本来自然の富岡氏、其一人は其経歴が造つた富岡先生」からも裏付けることができる。これは前項でも指摘した。

このような富岡先生像は、独歩の社会や人を見る目と重なり合つてゐる。独歩は「社会と人」において「自ら社会的に屈服す。何ぞ社会的を屈服せしむるを得んや。然れども悲しいかな、自ら社会的に克つ事、実に難し」と述べ「社会的」に勝つことがいかに難しいか訴えている。また、独歩自身もしばしば「社会的」に屈服させられたことを記している。細川繁を独歩の最高理想の「英雄」とするならば、富岡先生は「社会的」の中でもがき苦しむ「凡人」の典型であると言える。

プロットについて述べる前にまず、北野昭彦の説について整理しておきたい。北野は独歩がどのようにして富岡先生という人物を発想し、造形したのかについて検証を行っている。富岡先生を「その反逆精神が実は世俗主義の裏返し」であるように実在のモデル富永有隣よりも矮小化し、典型化したと述べている。さらに、「まぼろし」後編の「渠」のモデルである松岡信太郎の経歴が富永有隣と類似していることを指摘し、維新後「脇道へそれ」た有隣と松岡との類似性が独歩に「其経歴が造つた」富岡先生の性格や運命の人としての視点を有隣と共に同類的に与えたと述べ、松岡信太郎が有隣以上に「其経歴が造つた富岡先生」の造形に影響したという考察を行っている。

確かに富岡先生を造形した要因の分析としては外部資料を周到に集め、深い分析を行っているが、北野の分析で疑問を感じるのは他の登場人物との関わりにおいて富岡先生像をきちんと位置付けているのだろうかというところである。北野の分析によると、例えば第四章で細川が富岡先生に「貴公は高が田舎の小学校の校長ぢやアないか」、「身の程を知れ！馬鹿者！」という箇所を引用し、これを先生の世俗的欲望が満たされなかったための憂さ晴らしに過ぎないと述べている。しかし、単に「憂さ晴らし」と断じられるほど富岡先生の内面心理は一面ではなからう。また、北野は高山についても「彼自身の内にある事大主義・權威主義に自

ら気づいてない。だから、それが先生を怒らせているのだということに全く理解が及ばず、先生の怒りを先生の偏執ひんしつのせいだと決めつけて、自らを納得させる以外にないのである。」と分析しているが、高山と富岡先生の作品中のやり取りの中でそのように高山を形象することに對して疑問を感じざるを得ない。先にも指摘したが、高山は村長への手紙において冷静に富岡先生の人物分析を行い、適切な対処法を村長に依頼した。感情に流されないう冷静沈着な人物である。だが、北野によると高山が富岡先生を偏執ひんしつであると決めつけ、先生を怒らせていることに自ら気づいていない人物だとしている。これらの北野の論点はあくまで富岡先生を造型せしめた要因についてその主眼が置かれているため、他の登場人物との兼ね合いによる検証が手薄になったのではないかと考えられる。本論では富岡先生と他の登場人物との深い関わり合いを通じてその形象を試みてたい。

富岡先生が「個人感」と「社会感」が戦っている人物であることと細川が個人感をもった「英雄」像であることはすでに指摘した。第一章から第三章にかけて彼等の「個人感」「社会感」は徐々に現れ出す。例えば「彼は全く失望して了つて。其失望の中には一の苦悩が雑つて居る」(第一章)とあり、細川が個人感によつて社会感に抗う姿が映し出されている。また、富岡先生は東京から帰つて来てから頑固、ひねくれがますます酷くなり(第二章)、終には梅子をも叱るようになった。(第三章)そして、重要なのは第四章である。富岡先生の荒れ様はピークに達し「貴公おさまよ

く考へて見ろ！貴公は高が田舎の小学校の校長ぢやないか」、「身の程を知れ！馬鹿者！」などと罵倒するが、細川は「其握りしめた拳の上に熱涙をはらはらと落」としながらも「社会的」に屈さず耐え忍んでいる。つまり、この章では細川に「個人感」の代表(「英雄」)を担わせて、富岡先生に「社会感」の代表(「凡人」)を担わせ、「個人感」と「社会感」を相戦わせる様にプロットを形成している。付言するなら、富岡先生の内面でも「個人感」と「社会感」は戦っているが、最後のクライマックスでは細川(「個人感」と富岡先生(「社会感」)の対決の構図となり物語最大の山場を迎える。これらを総括して考えると「個人感」「社会感」から成る物語の構造が浮かび上がってくる。

さらに、この作品の構造を知るうえで重要なことは第三章と第五章に書簡形式の挿入があることである。それは新保邦寛も指摘しているが、作品の読解にそれがどう関わっているのかももう少し詳しく調べてみる必要がある。

まず、第三章で村長宛の手紙を書いたのは高山である。高山の人物像は先にも触れたが、富岡先生からその人間性を評価され、梅子に対してもその容貌よりもすりとした人柄に好意を寄せている。富岡先生の人間性を冷静に分析し、村長に折を見て切り出すように慎重な計画を立てることができると頭脳明晰な人物である。他方、第五章で高山宛に手紙を書いたのは村長である。村長の人物像はと云うと「四十何歳といふ分別盛りの男で村には非常な信用があり財産もあり、校長は何時いつも此人を相談相手にして居

四

る」という箇所からは村長の強い社会的信用が読み取れる。また高山の手紙の中には「此の辺は實所あなただに於て決して遺漏ぬかりはないと信ずる」とここからも村長の賢明さや信用の厚さが伺える。さらに富岡先生が死後の事について依託したのも村長で、かつ細川と梅子の媒酌人になるよう依頼されている。村長は富岡先生を初め誰からも信頼の非常に厚い人物である。

この二人が第三章と第五章で手紙のやり取りをする効果は富岡先生の人物像をよりの確に客観的に分析することと、読み手に対して富岡先生像の形象の信憑性を高めることである。さらに、高山と村長の富岡先生像の分析は完全に一致している。「先日の御手紙には富岡先生と富岡氏との二個の人が此老人の心中に戦つて居るとのお言葉が有つた、実に其の通りで拙者も左様思つて居た」このように第三章と第五章に書簡形式を挟み込むことによつて比較的、正確かつ客観的な富岡先生像が浮かび上がってくるのである。さらに「手紙」というのは書き言葉であり、話し言葉に比べて無駄な言葉が削られる。なぜなら書き言葉は書く前に内容を吟味し、余計な記述を初めから省くようになされるからである。作品上で書簡形式のもたらす意味は短く正確に富岡先生像を浮かび上がらせることである。この挟み込みによつて「本来自然の富岡氏」と「其の経歴が造つた富岡先生」の相戦う模様が第三者による思い込みや偏見ではなく、より信憑性と客観性を高める効果があるのである。

さて最終章（六章）に注目してみよう。ここでは細川と梅子の婚礼が終わつたことと富岡先生が亡くなつたことについて短い叙述があるだけで一見するとその章の存在意義があまりないようにも受け取られる。だが、この短い叙述の中にも作品の主題と関係すると考えられるいくつかの重要な手掛かりがある。

さて富岡先生は十一月の末終に此世を辞して何国は名物男を一人失つた。東京の大新聞二三種に黒梓二十行ばかりの大きな広告が出て門人高山文輔、親戚細川繁、友人野上子爵等の名がずらり並んだ。（中略）然し此の広告が富岡先生の此の世に放つた最後の一喝で不平満腹の先生がせめてもの遺悶こころやりを知人に由つて洩らされたのである。心ある同国人の二三はこれを見て泣いた。

ここで言う「大新聞」とは漢語調の政論新聞のことであり、「東京日日新聞」や「万朝報」などを指す。この大新聞の読者層の中には無論、明治の元勳達も含まれている。大新聞に黒梓で故意に目立つように掲載されることによつて富岡先生の虚栄心や尊大さを満たそうとしたのであろう。それが「最後の一喝」となつた。

ここで注目すべきは二三の者がこれを見て泣いていることである。「二三」という数字が大切で、三四人なら少し多過ぎる。つまり、ほんの僅かたつた二三人の者しか富岡先生の胸臆を知る者

がなかつたということになり、しかもこの二三の者は「心ある同国人」とされている。他の多くの人々は同国人ではあつても、富岡先生がひねくれ者で頑固で意地張りだと思ひ込んでゐる。この僅か「二三の同国人」だけは富岡先生の本来真実の姿（「本来自然の富岡氏」）をわかつていて、先生の短所や長所も知つてゐた。死んでしまつてからも大新聞に黒粹入りで故意にその存在を目立つように仕向け、その鬱憤を晴らそうとすることに憐れさや感ぜ、その人柄を偲び、涙を流してゐるのである。それは本来の富岡先生は誠実さややさしさを備えてゐる（「本来自然の富岡氏」）にもかかわらず、人前に出るとそのように尊大にしか自己表現できないことを理解してゐたということであろう。富岡先生が「凡人」であるがゆえに「凡人」ならではの憐れさや哀感をより一層感じ取つたのである。

物語の巻末にこの「二三の同国人」の涙を付け加えることによつて作品に尽きぬ余韻を漂わせてゐる。さらに二三という僅かな数であるからこそ余計に哀感や情感がそそれられると言へる。なぜなら富岡先生の真実の姿を知る者はたつたそれだけしかないということであり、孤独な哀愁感がそこに色濃く滲んでゐるからである。

以上のことを踏まえつつ、作品の主題について考えてみよう。この作品は比較という技法を繰り返し用ひ、「個人感」と「社会感」を戦わせて「凡人」の心の奥底に迫り、人間の真の憐れさや悲しさ、可愛さなどを文学作品において具象化しようと試みてゐる。

そこには人間の煩惱による哀れさが滲み出ている。独歩の言う「詩化」⁽⁶⁾とはこのことであろう。細川繁のような理想的英雄像を登場させ、この作品のクライマックスである第四章で激しく二人を戦わせたのは、「英雄」と「凡人」を比較し、より鮮明に「凡人」の胸臆を浮かび上がらせようとしたからである。

「欺かざるの記」には次のような記述がある。「比較は最も能く吾人に人心の変化を教ゆ。人心は染み易く、迷ひ易し。其の迷、皮相を見んと思はば現実の人間の比較にしくはあらず。則ち人々の内なる生命の比較に如くあらず」（明二六・八・二二）。この「人心の変化」や「迷ひ」は、富岡先生の胸臆にも顕在し、「本来自然の富岡氏」「其経歴が造つた富岡先生」のように作品中で具象化されている。理想的英雄像、細川繁と凡人の典型、富岡先生の比較を試みたのも、この人心の「皮相」や「迷ひ」を見んがためなのである。さらに、独歩は詩人の本懐についても次のような見解を示している。

吾れ詩人の本文を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調を聞て之を説明し、之を教ゆるに在り則ち此の幽音悲調はクリストよりも孔子よりも、ウオルゾウオルスよりも、又たシェークスピア、王陽明等よりも聞くを得べし、又た自らの靈よりも聞くを得べし。聞て而して之れを發揮する所以は則ち以て人間を教ゆる所以也。（明治二六・三・三一）

とあり、「人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調」はクリストや

孔子などの聖賢よりも聞くべき価値があるとし、あるいは自己の魂の声よりも聞くべきだと主張している。富岡先生が凡人であるがゆえに滲み出る哀れさや儂さは、この「人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調」に等しいと考えられる。ゆえに富岡先生の胸臆において發する「幽音悲調」（悲哀や儂さ）を作者が聞き取り、読み手に感じ取らせ「教ゆる」ことこそがこの作品の目的であり、主題となり得るのである。

独歩はモアール富永有隣の内に「人間胸臆の深底に於いて發する幽音悲調」を聞き取った。彼の澄みきった心が深く感じ取ったところを熟成させ、それを物語として具体化することを試みたのである。そこには煩惱に揺れる一人の人間の真実の姿が描かれている。

この作品は北野昭彦が論じる性格悲劇が主題であるとするなら自然主義的作品系列に位置付けられることになるのであろう。だが、本論において分析したように煩惱をもった人間の醸し出す儂さや孤独な哀愁が滲み出ていることなどを鑑みてみると、むしろ浪漫主義的色彩を色濃く受けた作品であると考えられるのである。作者が自身の第二短編集『独歩集』の冒頭第一番目に「富岡先生」を配したことからもその自負を窺い知ることができる。

註

(1) 「牛肉と馬鈴薯」(「小天地」明三四・一一)、「少年の悲哀」(「小天地」明三五・八)、「酒中日記」(「文

藝会」明三五・一二)、「運命論者」(「山比古」明三六・三)、「春の鳥」(「女学世界」明三七・三)

(2) 北野昭彦「国木田独歩(富岡先生)の人物造形および発想の根底」(「論究日本文学」昭四九・一二)

(3) 桑原伸一「富岡先生」(「国文学解釈と鑑賞」平三・二)

(4) 新保邦寛(「独歩と藤村」明治三十年代文学のコスモロジー」有精堂平8・2)

(5) 「欺かざるの記」明二六・七・二〇)

(6) 「火の柱」(「毎日新聞」明三七・一・一)同年三・二〇)

(7) この作品は六つの章から成り、「独歩集」(近事画報社明三八・七)によると各章ごとに(一)(二)(三)……のように章番号が振られ、各全集もそれに倣っている。

(8) これについては桑原伸一が「富岡先生」(「国文学解釈と鑑賞」平三・二)ですでに指摘している。

(9) 「欺かざるの記」明二六・八・二二)

(10) 「独歩遺文」明四四・一〇)

(11) 北野昭彦によると「個人感」とは名利の争いや、その争いで生じた悪しき伝習、その伝習がうみ出す迷信や惑わし、偏見、妄想、虚偽などのいわゆる「社会的」に作られた一切の囚われから脱却して、純粹な人間として、純粹なものを感じること」としている。北野昭彦「国木田独歩の文学」(桜楓社 昭四

九・九)

また、滝藤義満は「個人感」は信仰の境地、安心立命の境地」であり、「社会感」とは人間墮落の最要件、宗教を殺す者、天才を殺すもの」等々と規定している。

〔国木田独歩論〕塙書社 昭六一・五)

一方、山田博光は「個人感」とは天地生存の感であり、崇高な感情である。「社会感」とは人間の社会意識のことで、虚栄とか競争とか利欲のからまる墮落した感情である。」とする。(「国木田独歩論考」創世記 昭五三・九)

(12) 『欺かざるの記』(明二六・四・七)に「吾は次第に自由社に出席することの無用なる如く感ずるに至りぬ、而もパンの為に忍んで出席したり。かゝる事に全く無経験なる吾には一種云ふべからざる不快を感ぜられしなり。ア、寧ろ憐れめ、此の哀れの青年を。渠は理想を有し、其の理想の為に生くる外、生くるに甲斐なき此の世なりと信するなり。渠は之を為さんがために食ふを望んで、只食ふがために四肢を動かすを求めざる青年なり。」東京専門学校を退学して以来、独歩は人生初の社会経験を味わうが、自由社入社後の彼は現実と理想の狭間で苦悩する。彼の言う「社会的」と抗っていくことになる。

(13) 「凡人」については独歩遺稿に「凡人の傳」がある。独歩は英雄や君子の伝記や功業のみならず、川岸に立つ茅

屋の一家族やその老夫らの歴史が人情や涙が多く、意味深いものではないかと述べている。また、彼等の内に入り、その世界を見ることを切に願っている。

(14) 富永有隣—文政四年生(一八二二)周防国に毛利藩士として生まれた。三二歳の時、萩の野山獄へ投ぜられ三七歳の時出獄。松下村塾に招かれた。

(15) 「まほろし」(「国民之友」明三二・五)

(16) 「余が目的は此一種の人物を描くに在て、此人物を詩化する為めに、あれだけの事件が出来上つたのである」

〔余が作品と事実〕「文章世界」明四〇・九)

山口実男(伊丹市立鈴原小学校教諭)